



顧客の期待に応えられる防水施工をし続け…

(株)エフワンエヌは創立から30周年を経て、施主様や設計士の皆様に支持して頂ける企業となり『技術・営業・施工』の三位一体の考えでメーカーとしての責任、営業としての責任、施工会社としての責任を担ってきました。今では国内8拠点、海外9ヵ国11拠点にまで発展し、日本全国から世界へもジャパングオリティを提供しております。

そしてこの度、AXSP「高強度ウレタン・ゴムアス複合塗膜防水TEP153工法」は(一社)日本建築センターの建設技術審査証明事業(建築技術)において、委員長である田中享二東京工業大学名誉教授他、名だたる審査委員の皆様の評価を受け見事、建設技術審

査証明書:BCJ一審査証明-282を受け取ることができました。

この審査証明事業は、建築物等に用いられる建築技術全般に関し、民間で開発された様々な新しい技術について審査・証明を行う事により、民間における研究開発の促進とそれらの新技術を、建設事業に適正かつ迅速に導入する事を図り、建築技術の向上に寄与しようとする目的で実施されたものになります。

この技術審査証明書及び報告書は、日本建築センターより全国の行政庁や官庁営繕部に配布されておりAXSP:TEP153工法を新技術として周知して頂いております。

全71ページにも及ぶ報告書ですが、ぜひ一度皆様にもご覧になって頂ければ幸いです。

(株)エフワンエヌは皆様に安心して設計して頂けるように努力してまいりますので、今後とも宜しくお願い致します。



建築確認検査、住宅性能評価、住宅瑕疵保険、
構造計算適合性判定、省エネ適合性判定のほか
インスペクション業務なども行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

地域会だより 1

連載：マクロとミクロの視点から組み立てた
景観計画群のマネジメントの実践
—日本建築学会賞受賞業績記 第3回— 2
浅野 聡

第26回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2021 — 4
浅井 裕雄・宇佐見 寛・高木 耕一・吉村 真基・若林 亮
坂口 雄亮・長谷 真彩・山田 明日香
奥井 康史・矢田 義典・小田 義彦・加古 斉・廣瀬 高保

JIA 建築家大会について
沖縄支部からのメッセージ 13
伊良波 朝義

自作自演 246 13
夢窓疎石の西芳寺を思い描く
才本 清継

残暑広告 14

保存情報 第237回
データ発掘：西区児玉3丁目界限 旧志水家車寄 15
尾関 利勝

編集後記 15
黒川 喜洋彦・服部 昌也

初夏の植木生産園場見学会 16
西村 和哉・朝日 宏和

地域会だより 今後の予定

■静岡地域会

- ・9/9 静岡地域会役員会の開催 (WEB 同時開催)
- ・10/7 静岡地域会役員会の開催 (WEB 同時開催)

■愛知地域会

- ・9/4、5 とよはし都市型アートイベント Sebone (セボネ)
- ・9/17 第4回役員会 (WEB 併用)
- ・9/24 講演会『電腦設計論壇 #09』(オンライン方式)

■岐阜地域会

- ・9/16 第5回役員会 ZOOM 役員会 18:00 ~ 20:00

■三重地域会

- ・9/17 第4回役員会、第3回例会 (ZOOM 会議のみ)

Bulletin Board

講演会

電腦設計論壇 #09
巴山 竜来氏 講演会



愛知地域会では、コンピューターを用いた設計手法の講演会シリーズ「電腦設計論壇」を企画しています。第9回目は、数学を教える傍ら、その知見を活かして美術家としてコンピューターを用いたアート制作を行っている専修大学の巴山 竜来(はやま・たつき)准教授をお招きし、西陣織のデジタル・ファブリケーションや、充填形の建築への応用など、数学/建築/デジタルを横断した様々な事象についてご講演頂く予定です。

■日 時：9/24 (金) 18:30~20:30

■受講登録ページ：

https://zoom.us/webinar/register/WN_11LEhYc8RmKtlv9YcFJA3w
(QRコードからもアクセスできます)

■参加費：無料

(CPD 単位取得希望者は受講料 1,000 円 / CPD 2 単位：希望される方はリンク先の指示に従って受講料をお振り込みください。)

表紙 笠覆寺(笠寺観音)信徒会館の天井

音楽イベントを行う事が決まっていたが、地型が正方形だった。正方形や円形の建物は定在波が発生しやすく、音響的に不利だ。そこで、数学者から提案された幾何学図形を用いて、反射音が最大限散らばるように天井形状の最適化をおこなった。その結果として、真言宗で用いる曼荼羅のようなパターンが天井面にあらわれた。

音響解析では定在波は消えているが、「音楽にとって良い音場」であるかは未知数だ。この耳で確かめてみるしかない。



東福 大輔 (JIA愛知)
零三工作室

マクロとミクロの視点から組み立てた 景観計画群のマネージメントの実践

— 日本建築学会賞受賞業績記 第3回 —



1. はじめに

第1回と第2回では、筆者が三重県域を対象にした景観計画群のマネージメント(調査・策定・運用・普及)を実践するにあたり、設定した5つのコンセプトについて言及させて頂いた。本稿では、景観まちづくりに関わる地域として設定した「三重県らしさを構築する3つの圏域」(①歴史街道文化圏域、②伊勢志摩国立公園圏域、③世界遺産圏域)の中から「歴史街道文化圏域」を取り上げ、実践したプロジェクトについて述べてみたい。

2. 日本の国土構造を決定した

近世城下町群と歴史街道網

日本の都市計画の歴史は、古代(飛鳥時代)において中国の都城をモデルにした初の計画都市である藤原京が建設されてからその幕が開いていく。藤原京から平城京、長岡京、平安京へと遷都され、やがて中世(鎌倉時代)に入り武家政権により要塞都市として計画された鎌倉へと新都市の建設は引き継がれることになる。そして現在の日本の国土構造の骨格を決定したのは、近世(安土桃山時代~江戸時代)の国土計画と都市計画である。この時代に計画都市である近世城下町群が国土を覆うように建設され、やがて徳川幕府による幕藩体制が整い、参勤交代に伴い全国の大名家と家臣団が藩と江戸の往復を繰り返す中で、全国レベルの交通網と流通網が整備されていく。藩の拠点である近世城下町を起点に陸上交通として街道網と宿場町が、海上交通として水運網と港町が整備され、これらがネットワーク化されて現在の国土構造の骨格が形成されたのである。

以上の理由から、近世に形成された歴史街道文化圏域は、歴史的町並みや建

築物、伝統行事といった有形無形の地域資源が豊富にあり、現代において地域らしさを活かした都市再生を行う上で(他市との差別化をはかるために)大切な宝物となっている。

3. 亀山市における

景観まちづくりプロジェクト

第1回において言及した通り、三重県の県土構造は、「東海道」を中心とする街道群と「伊勢街道」を中心とする街道群から構成されていることが特徴である。以下、東海道の関宿(国の重要伝統的建造物群保存地区に選定)の町並みで有名な亀山市におけるプロジェクトについて述べてみたい。

亀山市のプロジェクトの特徴は、①景観計画だけではなく歴史まちづくり計画(歴史的風致維持向上計画)と連携して取り組んだこと、②東海道沿道の町並みを対

象にして(通常は行わないような)長距離かつ広範囲に渡って景観調査を実施したこと、であり、4年間(2008年度~2011年度にかけて)取り組むこととなった。この当時、亀山市は、歴史まちづくり法(地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律)にもとづく歴史まちづくり計画の策定を検討していた。これは2008年に同法が制定され、市町村が策定する歴史まちづくり計画に対する国の認定が始まったためである。国に認定されると歴史的環境の整備(歴史的建築物の修理・修景等)に対して国の財政支援を受けることが可能となり、そのためには景観計画の策定も必要であり景観調査を実施することになったのである。

歴史まちづくり計画における重点区域は「東海道沿道区域」となっており、全長19.5km、面積約500haという長距離かつ広範囲に渡るゾーニングであった。



図1 亀山市歴史的風致維持向上計画

これは亀山市の歴史的風致は街道文化そのものであり東海道を軸にして線状に地域資源が存在しているためである。(図1) 景観調査も東海道沿道の全ての町並み・集落を対象に行うことになり、調査の結果、対象地区面積は305.5ha、対象建築物は3,388棟となった。一般的に調査対象となる町並みの全長は数百m~1km、建築物は数十棟~数百棟程度であることから、この調査が大変であったことはJIAの会員の皆様には察して頂けるのではないと思う。

4. 歴史街道の原風景としての

シークエンス景観

景観調査は、主に道路から望みできる建築物の外観を把握するものであり、建築物の種別、用途、構造、階数、壁面位置、屋根、軒・庇、外壁、開口部、樋、外構、駐車場等の項目について記録し、写真撮影を行うことが基本となる。(図2) また地元の建築士等による「ふるさと文化資産保全活用研究会」に協力を依頼し、景観重要建造物に指定できる可能性のある候補物件を把握するための調査も行い、調査の結果、候補建築物は294棟となった。

この膨大な調査は、データ収集と分析にマンパワーを要して大変であったが、一方で得たものも多かったのである。東

海道沿いの城下町、宿場町、農村集落の全体像を把握するための広域調査が実施されたことはなく、まちの種別が変わるとどのように景観が変化するか、街道沿いの建築物は何種類に類型できるのか、といったことは明確にわからない状況であった。

しかしながら、全長19.5kmもの東海道を歩いて悉皆調査をすることによって、「農村集落→宿場町→城下町→農村集落→宿場町」というように、城下町の周辺では「農村集落+農地+宿場町」が地形による変化を加えながら繰り返して出現し、全体として景観が緩やかに変化しながら連続するというシークエンス景観を把握することができた。そして城下町に入ると「町人地→武家地→城郭」と明確なゾーニングにもとづいて変化するシークエンス景観があり、周辺景観と比較して城下町が計画都市であることを再認識できたのである。

これと同時に建築物の種別の類型とその分布状況も把握することができた。建物種別としては、①武家屋敷型建築物(武家地に立地)、②町屋型建築物(I)(町人地や関宿に立地)、③町屋型建築物(II)(坂下宿や集落に立地)、④町屋・農家中間型建築物(集落に立地し、主屋が通りに対して後退・対面して建つ)、⑤農家型建築物(集落に立地し、主屋が通りから

後退して建つ)、⑥土蔵、⑦社寺型建築物、⑧近代建築(明治時代~昭和時代における近代的な建築物)、の8つに類型することができ、これらが連続して景観が形成されていることがわかったのである。(図2)

これらの建築物群によって変化するシークエンス景観は、昔の旅人たちにとってはあたり前のように目にしていた街道景観であったと思われるが、街道を歩くことを忘れてしまった私たちにとっては、歴史街道の原風景を再認識する貴重な機会になった。

5. 景観計画への反映

景観調査の結果も踏まえて、歴史まちづくり計画が策定され国の認定を受けることができたとともに、景観計画も策定され、住民説明会や景観審議会等での審議を得て3つの景観形成推進地区(亀山城下町地区・関宿周辺地区・坂本棚田地区)と1つの眺望景観重点地区(百六里庭-関宿眺望景観重点地区)の指定を実現することができた。一定の成果を上げることができた。現在、両方の計画は運用中であり景観整備の成果が出始めている。

6. おわりに

本稿では、歴史街道文化圏域の中から亀山市を取り上げ、東海道を対象にした広域調査、調査結果から再認識した歴史街道の原風景としてのシークエンス景観について説明させて頂いた。

東海地方は、近世社会をつくりあげた三英傑(織田信長・豊臣秀吉・徳川家康)を生み出した地域であり、近世城下町や宿場町、東海道や中山道、関ヶ原古戦場といった豊富な地域資源があり、これらを継承・活用して都市再生に資する可能性を持っている。JIAの会員の皆様は、ヘリテージマネージャーとして活躍されている方も多くと思われ、今後も失われつつある歴史的建築物等の活用に尽力して頂ければ幸いである。次号では、引き続き実践したプロジェクトを紹介してみたい。



浅野 聡
三重大学教授

歴史街道文化圏域 景観調査



武家屋敷型建築物	町屋型建築物(I)	町屋型建築物(II)	町屋・農家中間型建築物
農家型建築物	土蔵	社寺型建築物	近代建築

図2 景観調査(町並み調査)項目と建物種別(東海道:亀山市)

第 26 回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2021

2021 年 5 月 29 日の審査会にて「第 26 回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2021」の受賞作品が決定致しました。審査結果と講評、受賞者の声などを掲載します。

○【金賞】	「静かなる自然の侵略」	坂口 雄亮 (名城大学)
●【銀賞】	「せと物のまち せと者のうつわ—陶土採掘場における土の再考—」	長谷 真彩 (名古屋工業大学)
●【銅賞】	「いとなみ横丁—私有地の供出による郊外居住地域の再編—」	山田 明日香 (名城大学)
【佳作】	「集落ノ共生作法—「河岸家」による漁業基盤の再構築—」	林 佑樹 (愛知工業大学)
【佳作】	「漂う創造」	谷 俊栄 (名古屋工業大学)
【入選】	「xxx-ing Mallization」	上野 拓人 (大同大学)
【入選】	「多重奏の作法—インテリアの空間構成要素と行為の関係性—」	田中 聖竜 (大同大学)
【入選】	「都市水景再生」	沢田 雄基 (名古屋工業大学)
【入選】	「つながりと緑の庁舎」	奥山 堅太 (愛知工業大学)
【入選】	「住みツグ」	井上 玉貴 (愛知工業大学)

審査員長



浅井 裕雄
南裕建築計画
JIA 会員

審査員



宇佐見 寛
㈱アトリエ ルクス
JIA 会員

審査員



高木 耕一
東畑建築事務所
JIA 会員

審査員



吉村 真基
吉村真基建築計画事務所/MYAO

審査員



若林 亮
㈱日建設計
JIA 会員

審査総評

JIA 東海では、3 年ぶりに学生設計コンクールを開催することができた。

この地域の学生にとっては、一つの評価の場が復活したことはとても良いことで、建築を目指す、若い世代と建築家が会える。このことは、この地域の実務者にとっても建築に対する新たな視点に出会えることで、すばらしい事だと感じる。継続していく体制づくりを検討しなくては。

1 次審査では 36 作品が集まりました。多くの作品が、作図作画、プランニングなど、とても技巧的で建築をじっくり学んできていると感じます。

1 次審査での初回投票は、各審査員 10 票を投票。得票結果の分布は幅広く、得票数ごとに議論をして、再投票の結果 10 作品を 2 次審査に送ることにした。

「見え隠れする小景」以前は地域を支えていた産業が衰退して、街には痕跡がいくつか残っている。それらの

原風景を浸透度という数値化でファサードを構築する手法はユニークだった。「Inter-changeMARKET」は、日々の買い物行為がネットをつかった購買へとなっていくことで、マーケットのあり方が変わる。また、次世代の社会基盤である電化され自動運転をもった、モビリティサービスとの地域社会基盤につながる提案は近い将来を想像している。「Green Poche」都市に残った農地、人口減少において、維持活用のアイデア、また「まなびノ農舎園」では、人口が増えている愛知県幸田町で子供と農業の施設を提案している。他に漁業にまつわる提案も複数。第 1 次産業の活用は縮小社会の課題である。

「邂逅の空隙」は、街の形成に至る過去の痕跡を敷地と建築に切り取り道を通す減築手法としてみると面白い。

「超擬態構築」や「街角群像劇」既存

の裏のような風景を再構築していく考え方の作品が他にもいくつかあった。その他、マンションなどの間取りをロジカルに再構築するなどやはり、多くの作品がリノベーションもしくは、再構築といった日本が持つ特有の課題を汲み取っている。その中でも、2 次審査へ通過した 10 作品は、社会的テーマの捉え方、建築への表現が優れていたと思う。

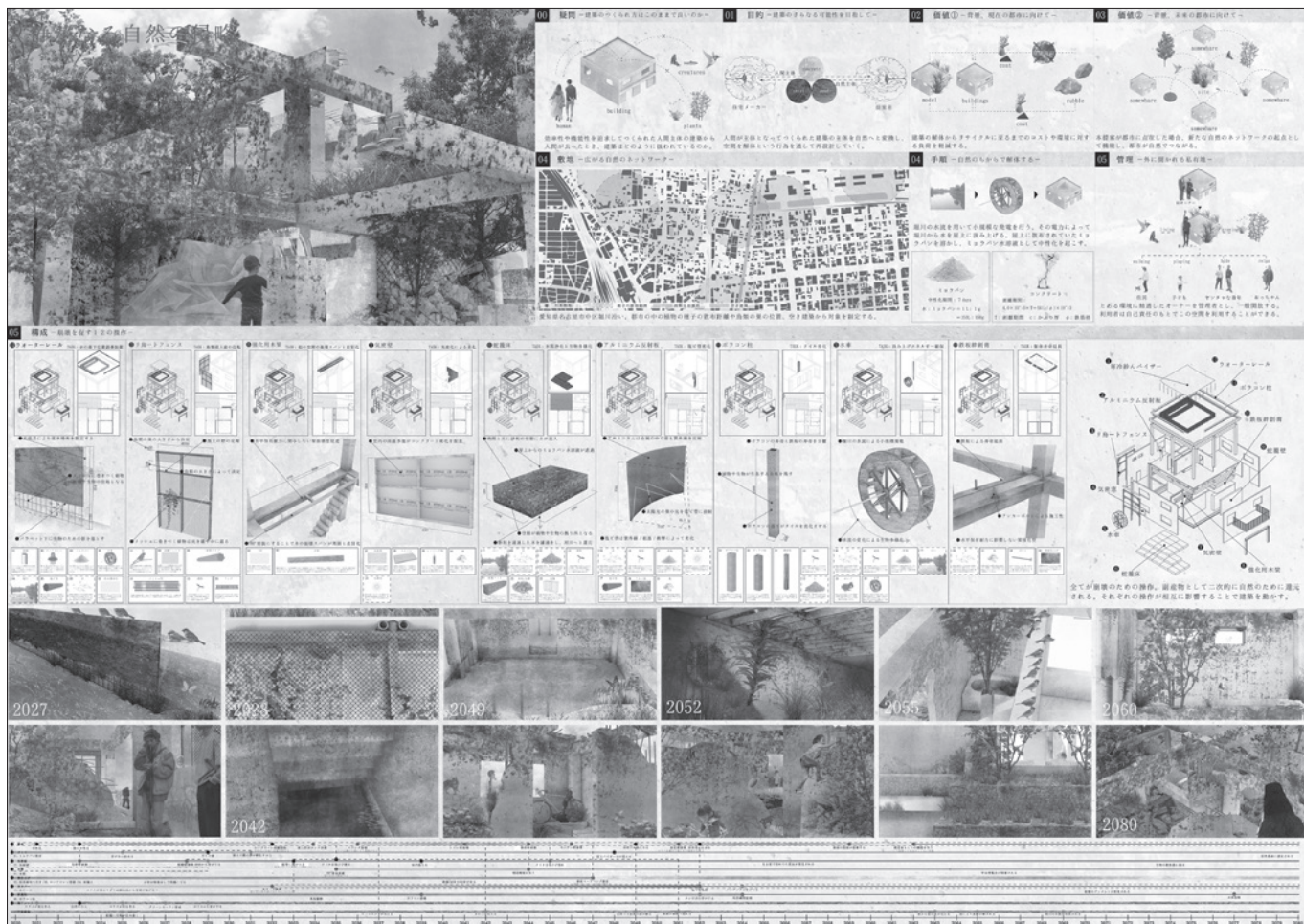
受賞作品の個別の講評はそれぞれいたしますが、若い人は、今の社会を敏感に感じ取っていて、我々のように実務に向き合っていると気づかない、小さな変化や変革、今回の作品を通して、学生たちは資本主義が曲がり角に来ているの予感しているようだった。

審査員長 浅井 裕雄



⇒ 金賞 ← Gold prize

「静かなる自然の侵略」 坂口 雄亮 (名城大学)



【講評】

建築は人のために、つくられてきた。

設計者は、「さらなる建築の可能性を目指して」として、建築は地球を構成する物質と等価に扱う。と提案している。

英国のキャサリン妃が、あるフランスメーカーのスニーカーを履いて、注目を集めた。このスニーカー、環境問題に関して強いメッセージを発信していて、オーガニック素材やリサイクル素材を使い、作り方も、工夫し持続的なエコなスニーカーです。ご存知のとおり、イギリスはファッションの中心地です。英国王室のアイコン的な王妃がエコに対してファッションとして、世界に表明している。

人を主体から環境主体である。環境性能については、20年ほど前から盛んに挑戦している建築界だが、人が使う前提の環境をシミュレーションしてきたが、街で

は見慣れている、残された建築、空き家のようなものが、崩壊しながら人ではないモノへの性能を発揮させて、新たな建築の価値を見出そうという思想は、今の時代を如実に表している。

建築を崩壊させる設計。

創り上げることが建築の中心だったが、崩れていくための12の操作を建築の各部に施し、まるで時限爆弾のように作動していく。その結末は60年先まで描かれていて、価値がある建築の始末の仕方を提案している。建築を中心として見た時の衰退カーブは、本来なら、竣工した時、近くがピークにあるものだが、この提案では、新築時のピークから徐々に下りだしていく曲線は、次の主体者になり、衰退に対するピークは崩壊が終わったところで、また現れてくる。そこにとても共感した。

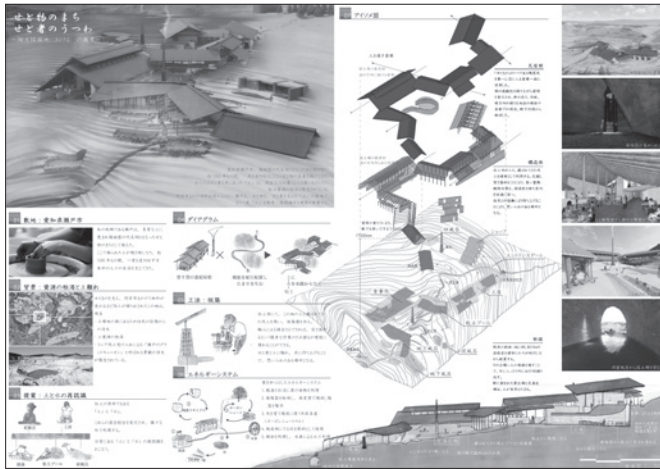
未来を感じ取る。

ダークサイドの美しさを全面に出しているところは、アートやカルチャーに匹敵する立ち位置で、クライアント不在の卒業設計だからこそとも言えるが、先にも述べたように、ファッションやカルチャーは、環境へのメッセージを強く打ち出していて、それは一つのメッセージとしての表現となる。これらをピュアに受け止める若者は、世界に広げる役割をになっている。

建築は長らく、崇高でロジカルに積み上げられたものを好んできたが、溶けてなくなる建築の過程までもメッセージとしてとらえ、そのような領域まで、建築は考えて行く時代が到来していると受け止めよう。さらに、次年度以降、アンビルドな建築提案がさらに進化していくことを楽しみにしている。 審査員長 浅井 裕雄

⇒ 銀賞 ⇐ Silver prize

「せと物のまち せと者のうつわ —陶土採掘場における土の再考—」 長谷 真彩 (名古屋工業大学)



【講評】

瀬戸のグランドキャニオン。この敷地を選んだことに深い意味があると感じた。山の土は採土されて「せと物」となり、その土により「せと者」達は生きてきた。いつしか山は消え、深く広大な渓谷に。形を変えてきた地形こそ、瀬戸のまちと「せと者」達の歴史であり、その歴史を継承し今の人々が身近に感じる場が素直に表現されている。地形に沿い配されたショップや工房、食事処、

さらに地上、地下の銭湯へと。これら一つ一つの棟を大らかに覆う切妻屋根の群造形が巧みである。

その棟の間を結ぶ水路に沿って、棟を渡りながら谷へ谷へと降りていく人々は、「せと物」と「せと者」の歴史を五感で学びとるのであろう。また谷地最下にある地下の銭湯からさらに露天へと向かう暗い洞窟を抜けると突然、広大な採土場の眺望が眼前に開けるドラマティックなシーンが展開する。その広大な渓谷に裸で対峙した人は、何を思えるだろうか・・・この情景に詩的なナラティブを感じた。

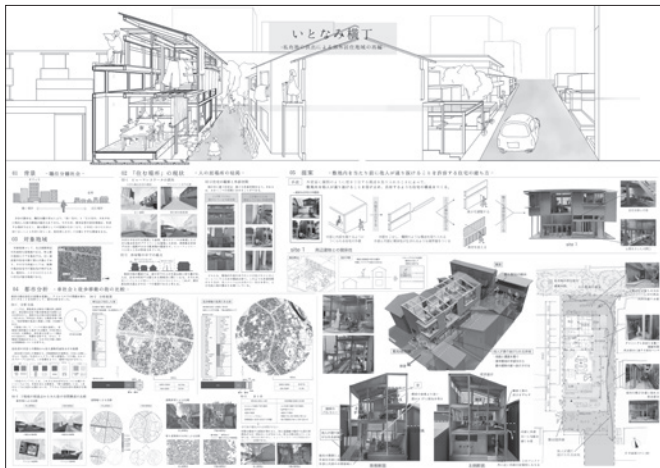
一方で焼成窯の排熱を再利用して銭湯、廃陶器を新たな陶器に再生する仕組み、さらには焼成時の灰を肥料にすることなど、エネルギーや資源の様々な循環の仕組みが盛り込まれている。

卒業設計は、学生時代に学んだこと、社会に対して感じたこと、自分の頭、手に育んだものを作図を通して表し、伝えることが大切である。この製作は学生時代の成長が感じられる力作であり、これからのさらなる活躍を楽しみにしたい。

審査員 若林 亮

⇒ 銅賞 ⇐ Bronze prize

「いとなみ横丁 —私有地の供出による郊外居住地域の再編—」 山田 明日香 (名城大学)



【講評】

この作品は、敷地境界線に生じるスペースを公共空間として供出し、コミュニティを生み、街を連鎖的につないでいくという居住地域再編の試みである。過去に負の産物として廃止されてきた赤道(里道)の復権と民法が規定した境界線の建築制限を逆手にとった、街のあり方をも覆す秀作な提案でもある。

供出した余地を媒体として、現代社会が抱えるコミュニティ問

題を道普請的な関わりあいから再生することとなり、さらには、防犯、防災、更新、建築、都市のあり方も再編されていくことになる。

提案においては居住地域の丁寧なサーチと分析から思考されていて、とても好感が持てる。そして、供出された路地空間に対してリニアに展開された建築プランと見る見られる関係性を生み出す空間演出も巧みであり設計のセンスを感じさせる。次に時間が過ぎ、供出された余地がつながった街を想像してみよう。コミュニティやヒューマンな暮らし方はとても素敵で、価値がある。そして、小さな生活空間であっても、経験したことのない世界観(クロスプログラミング効果)が広がるであろう。

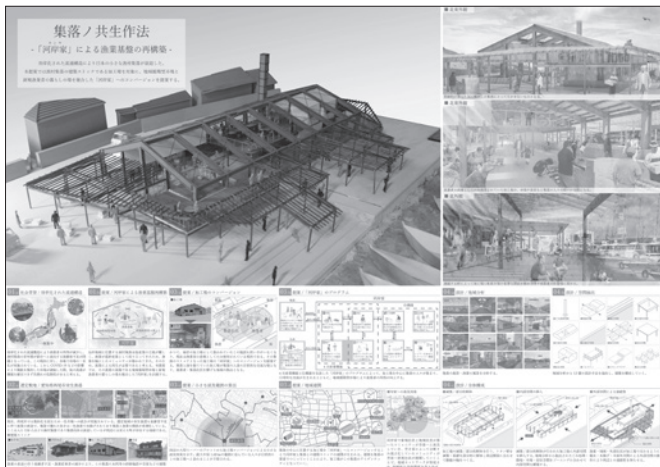
この再編提案ならば、条例なくして、紳士協定で成せる業で、実現性にも期待できる。供出した人は、街づくりに関わるという側面も持つ。このようなプロセスから生まれる街は、地域全体で関わりを持つことになり、地域の歴史、人々の記憶になっていく。

最後に、心温まる人間味溢れる提案ができる山田さんのこれからに期待する次第だ。

審査員 高木 耕一

⇒ 佳作 ⇐ Honorable mention

「集落ノ共生作法 — 「河岸家」による漁業基盤の再構築—」 林 佑樹 (愛知工業大学)



【講評】

過酷なグローバル競争と後継者不足により統廃合を繰り返して細り続ける小規模な漁港を、既存の加工場を「河岸家」として再構築することで、生産基盤としての活力を取り戻そうという作品である。1次産業拠点に6次産業機能を盛り込む、ところまでは聞いたことのある提案の方向性だが、この作品ではそこに住機能も含めている点でフィールドワークの分厚さと社会的文脈の読み解きの秀逸さがあると感じた。

1次産業は後継者不足に陥る一方、参入障壁がやたらと高く新規参入が大変困難であるという矛盾を抱えている。新しい担い手とど のように出会い共生していくかをデザインすることがこうした小規模生産拠点を活性化する肝になるであろう、という主張は納得できる。漁村の現状を見渡す視点とエリア調査による空き家、低利用建築ストック群の発見、さらにフィールドワークを通じてローカルなデザインポキャプラリーの抽出を試みている点などは調査・分析の分厚さを感じさせる。

提案はコンバージョンである。既存の加工場の大きな架構を生かし、そこに木造の下屋を取り付けて親水空間や6次産業拠点を配置し、2階レベルにデッキを設けそこに居住スペースを設ける。作り込まれた模型やパース表現に見られる建築空間は大変魅力的であった。

惜むらくは、プログラム提案と作り込まれた模型の間を架橋するはずの設計そのものへの言及が意外とあっさり通過されていたことが、いわゆる図面表現の不足と取られてしまったことだ。

既存の大きな架構を頼りに小さく軽い構造体が自由に取付くという組み立ては、骨太さと繊細さを同時に設計しており、見事なバランス感覚を感じる作品である。

審査員 吉村 真基

⇒ 佳作 ⇐ Honorable mention

「漂う創造」 谷 俊栄 (名古屋工業大学)



【講評】

“漂う創造”何とも意味深なタイトルである。計画案とまさに一致するタイトルであることに、まず気付かされる。この作品は、何よりも、造形が美しい。形態の捉えにくい水という液体と、ソリッドな建築、ポリウムとしての空間とをとてもうまく混合させて美しく表現、完成をさせている。水の動きと浸水していく様を想定した水の入り込み方まで想定して設計をしている。特徴的な形状

の3次元曲線は、浸水時の水の入り様がスムーズかつ美しい入り方をするのがわかる。また、調整池という、全く手付かずで、フェンスで仕切られた空間を市民が水害などを体験できる施設として生まれ変わらせるといった逆転の発想のもと、プログラムはこれからの社会に求められる企画の一翼の担っていると思う。全国で考えると、このような調整池を再利用、再構築してより良いまちづくりを目指して行きたい。市民が水の間際まで近づくことができ、水の恩恵、水の怖さ、自然の脅威を目の当たりにできるという体験型の施設でもあり、水不足の問題、洪水、土砂くずれなどの水災害などの水の二面性を体感して、行動に移すことを促す施設にもなりうる。

着眼点、造形美は非常に評価の高い作品である。ただ1点、この造形があって、シンプルなプログラム設定、計画案といった狙いはわかるものの、水の無い状態での施設利用の目的や、この計画地に来るための他の要素、用途を盛り込むと、より良いと考える。さらにこの作品の完成度を上げてほしいと切に願う。

審査員 宇佐見 寛

⇒ 入選 ⇐ 「xxx-ing Mallization」 上野 拓人 (大同大学)



【講評】

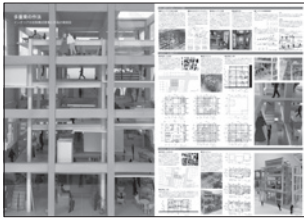
大型ショッピングセンターができると、地域の商店街は枯渇する。このことを逆に取り、商店街が栄えるよう両者をつなぐ「橋」のような商業モールである。着眼点がよく、大きくオーバーハングした屋根庇、幾重もの斜めの壁により緩やかに店舗空間をつなげる平面計画に造形力の高さを感じた。ただ一方で、大型ショッピングセ

ンターに訪れる客をいかに商店街に惹き込むか、その結果、商店街がどのように再生するかの視点、表現が弱かったのが惜しい。

建築は街の中に建ちながら街を変える力があるものと信じる。この発想力と造形力で、将来の街を変えていく人へと成長することを楽しみにしている。

審査員 若林 亮

⇒ 入選 ⇐ 「多重奏の作法 —インテリアの空間構成要素と行為の関係性—」 田中 聖竜 (大同大学)



【講評】

従来の構造グリッドを敷地と見立て、そこに材とスパンの異なる新たな柱梁グリッドを重ね合わせることで既存グリッドの意味を変容させる、思考実験的な作品である。新しく挿入されたグリッドによって普段はインフラとして不可視の存在となっている柱梁に身体的なスケールが生じ、家具としてあるいは仕切りとして、それまでにはなかった意味が生じる、というストーリーは大変興味深い。またリノベーションの提案だけでなく、「多重法」への意味づけが格段に困難になる新築の提

案に挑んでいるところは大変意欲的だと思う。ただ、この思考実験の目指すところが意味の変容にあるのであれば、新築の提案に際してはそれぞれの構造グリッドのサイクルが異なるなどもう少し丁寧な前提条件の作り込みが必要だったかもしれない。

いずれにせよ、建築において文字通りの柱梁グリッドを3次元的に重ね合わせるという、やってみると大変複雑で困難を極めるであろう設計をやり切った点には心から敬意を表したい。

審査員 吉村 真基

⇒ 入選 ⇐ 「都市水景再生」 沢田 雄基 (名古屋工業大学)



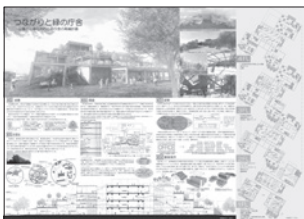
【講評】

堀川、中川運河は、かつてはまちの要、表舞台であったが、時代とともに衰退の一途を辿った。親水空間不毛の名古屋の街において、両運河のポテンシャルを引き出す再生プログラムは、リアリティも高く、実現への期待も夢膨らむ。松重閘門の遺構と水辺空間を媒体として、それらを楽しむことができるデッキ空間や図書館などを内包する交流

の場の構築は、とても魅力的である。沢田さんは、建築を創り上げる構築力、多くの要素を操るデザイン力、そして、プレゼン力を合わせ持ち、将来を期待して止まない。一方、プログラムとして、都市や水辺との関わり方がより強く意識され、言及できたならば、作品の評価がさらに高まったと思う。

審査員 高木 耕一

⇒ 入選 ⇐ 「つながりと緑の庁舎」 奥山 堅太 (愛知工業大学)



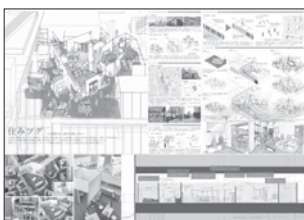
【講評】

市役所に公園を取り込む。実現をすれば、とても開かれた魅力的な行政である。夢のある提案である。夢だけではなく、既存建物を減築、耐震増築するといったかなり具体的な提案でもある。また、市民へのリサーチ、丁寧な平面計画立案など、建築に対する真摯な姿勢も好印象である。プレゼンテーションとしても非常に美しく、

見やすく構成されており、完成度の高い作品に仕上がっている。さまざまな人の利用が見込まれる。ゆえにそのあたりのアプローチ設計には細心の注意が欲しい。お堅いイメージの市役所が、もっと市民に近い、行きやすい場所になっているのではないかと思う。

審査員 宇佐見 寛

⇒ 入選 ⇐ 「住みツグ」 井上 玉貴 (愛知工業大学)



【講評】

名古屋駅の商業ビルの内側に住居を挿入して、さらに住空間の内側にシェアオフィスを挿入する。更に界壁は天井付近で開放されている。一般的には「暮らし」と「都市」を混在させることは、とても実験的で、人はどこまで開いていけるのかと挑戦的に指摘されているようだ。このような空間は、安心出来る暮らしとは言えないが、提案として、

ビル全体のビジネスの関係性から可能としている。また、その提案が新たなビジネスモデルを生む可能性もあるのではと感じた。暮らしの選択肢が広がる予感がする作品です。

審査員長 浅井 裕雄

受賞者の声

⇒ 金賞 ⇐ 「静かなる自然の侵略」

「建築が地球を汚している」
僕はそう思いたくなかった。

街を歩く中で、人間のためにつくられた建築が人間によって使われなくなり、放置されている状態はあまりにも無責任であるように感じました。それは建築が空間を生み出すという反面、何かから空間を奪っているということに気づいた瞬間でした。本提案は人間が主体となってつくられた建築を自然の力によって解体させる提案です。建築を重機で壊すのではなく「解体」という行為のなかに価値を見出せないだろうかという問いを立て、建築を人間主体の視点から自然主体の視点へと

思考を転換し設計を行いました。そこで、本提案の建築操作は建築を解体する点での汎用性を獲得するために個人が DIY 的に行える範囲のものしか存在しません。そこで、建築と地球との関係に注目し、腐敗した建築が大地に還元されながらその過程で空間の利用者が地球を構成する植物 / 生物 / 鉱物へと変化していくことで建築が自然の摂理へと還元される状態を目指しました。すると空間はあらゆる利用者が等価に振る舞うことのできるような状態となります。このように空間が大地を通して循環する状態こそが地球の摂理に寄り添った持続可能な建築の在り方な

のではないのでしょうか。現代社会において建築を根本から考え直した本設計は今後の建築設計という行為に対して非常に価値のある思考であると自負しています。そして、今後も大地と向き合い、数年後には建築界に革命でも起こそうかなと考えているところです。

最後に、卒業設計を指導していただいた先生方や設計を支えてくれた同期、後輩の皆さんに深く感謝申し上げます。



坂口 雄亮
名城大学

⇒ 銀賞 ⇐ 「せと物のまち せと者のうつわ —陶土採掘場における土の再考—」

もう一度、土と共に生きる。

せとものを支えたこの地を忘れてはいけない。その想いから卒業設計を始めました。

せと物のまちとして栄えたこの場所には、粘土を採るためにできた巨大なくぼ地が残されています。現在この地は、暮らしとの隔絶、粘土資源の枯渇、残土受け入れにより瀬戸のグランドキャニオンと呼ばれる景観の消失が懸念され、せと者の記憶からも、まちからも消えようとしています。この設計は、くぼ地を負の遺産としてではなく、地域らしさとして、せと者が

もう一度土と共に生きるための場所として提案しています。

かつて暮らしとともにあった土を建材・プログラムとして取り込み、土地と建築を一体とし、建物の内外を緩やかにつなぐことで、巨大なくぼ地のスケールとヒューマンスケールの融合を図りました。

私は卒業設計を通し「土地に根付くもの」について考えました。世界各所において、この地と同じような場所があり、更地にし、開発を行う事例は多くみられます。たとえ負の遺産と呼ばれる場所であったとしても、消してしまっただけはそこに根付

いていた、歴史、文化、暮らしも失ってしまいます。消してしまうのではなく、「その地に根付く要素を読み解き、未来に継いでいくための場所を創出する」ということを評価していただいたと思っております。今回審査員の皆様から頂いた言葉を受け止め、考え続けていきたいと思っております。

最後に、卒業設計を行うにあたりご指導してくださった先生方、先輩方、共に切磋琢磨し合った同期に深く感謝申し上げます。



長谷 真彩
名古屋工業大学

⇒ 銅賞 ⇐ 「いとなみ横丁 —私有地の供出による郊外居住地域の再編—」

家と職場の行き来の繰り返し。周りに誰が住んでいるのかわからない孤独感。そんな都市での生きづらさに問題意識を持ち、車社会による利便性を追求した結果、ヒューマンスケールを失ってしまった都市周辺の居住地域に対して、「住む場所」としてのあり方を問い直す設計を行いました。

街に建つ住宅を個人の所有物として捉え直し、住人それぞれが街に対して少しずつ私有地を提供することで、それが連続し、街の中にヒューマンスケールの空間を取り戻していく。『私有地の供出』という新たな住宅の立ち方の提案です。行政が行う大きな都市計画ではなく、そこ

に住む住民が協力して街を変えていくことで、都市の中に小さな日常が溢れ出す場を作り出すことが、都市での暮らしを豊かにするための一助になると考えています。

個人の私有地の供出は、ただ土地を開放してもらうだけでは実現せず、住宅本来のセキュリティやプライバシーの問題を解決する必要があります。本提案では、住宅の外壁面に欄間のような構成を取り入れることで、周囲との距離感を居住者自らが選択できる住宅の構成を提案しました。

JIA のコンクールでは、理想像の提案で止まるのではなく、制度化など、実現

していくためのプロセスまで提案するべきという指摘をいただきました。今後、取り組むべき課題のヒントをいただいたと思っています。今回いただいた賞や審査員の方々からの言葉を励みにこれからも精進していこうと思います。

最後に、この場を借りて、ご指導してくださった先生方、先輩方、支えてくださったすべての方々に深く感謝申し上げます。



山田 明日香
名城大学

審査に寄せて

■コンクール報告

3年ぶりに JIA 東海学生卒業設計コンクールを開催しました。

審査委員長を浅井裕雄さんをお願いし、審査員を宇佐見寛さん、高木耕一さん、吉村真基さん、若林亮さんをお願いしました。コロナ禍での審査ということもあり、初めてオンラインを併用した審査としました。

◇1次審査

応募時に提出された1枚のシートで審査しました。まずは、各審査員がそれぞれ10票を投票し、4票3作品、3票5作品、2票8作品、1票7作品、計23作品に票が入りました。4票、3票の入った8作品について審査員で協議し、2次に進めることに決めました。残り2作品を15作品の中から選定することにし、再度各5票で投票し、5票・4票が各1作品、2票6作品、1票4作品でした。これをもとに議論をし、5票・4票の2作品を加えた10作品を2次審査に進めることに決定しました。

■コンクールを終えて

3年ぶりの JIA 東海学生卒業設計コンクールを無事に開催でき心からホッとしています。

コロナ禍において、初めてのオンライン審査とせざるを得ない状況で、2月から毎週のように会議を重ね準備を進めてきました。審査員のみなさんにもご意見をいただき、審査方法、応募資料のルール、応募資料の共有方法、当日のタイムスケジュール、ハードの整備などなど課題は山積していましたが、学生にとって価値のあるコンクールにするためにはどうすることが良いかということを一義に一つ一つ議論し解決してきました。

おかげで、コンクールとしては単に無事に開催できたというだけでなく、審査員のみなさんの白熱した議論により、とても内容の濃いものになりました。

この場を借り、審査員のみなさん、水野支部長、森幹事長、矢田さん、上原さんはじめ委員のみなさんに感謝申し上げます。

◇2次審査

1次審査通過者10名に5分間のプレゼンテーションと約15分間の質疑応答をしていただきました。まずは各審査員が各5票を投票し、5票2作品、4票2作品、3票1作品、2票1作品、1票2作品となりました。そこで、3票以上の5作品について、1作品ずつ議論をした後、再度各3票を投票したところ、5票2作品、2票2作品、1票1作品となりました。そこで、5票2作品のどちらを金に、2票2作品のうちどちらを銅にするか、まさに決勝戦と3位決定戦の熱い議論が繰り広げられました。

議論の結果、名城大学坂口雄亮さんが金賞、名古屋工業大学長谷真彩さんが銀賞、名城大学山田明日香さんが銅賞、その他2作品が佳作、5作品が入選となりました。そして、金・銀・銅の3作品を JIA 全国学生卒業設計コンクールに出展することに決定しました。

コンクールを終え、本来、JIA 東海学生卒業設計コンクールを復活させるにあたっては、JIA 東海支部が開催する卒業設計コンクールの意義や価値について、しっかりと議論した上での再出発が必要だったと思っています。今回は初めてのオンライン審査ということもあり、コンクールを復活させること自体を最大の目標とすることでスタートしましたが、来年は更に価値のあるコンクールに発展させたいと考えています。

そのためには、より多くの会員の方の知恵と熱意が必要です。「将来を担う学生の力になりたい!」「若い感性を目の当たりにし刺激を受けたい!」「なんか面白そう!」など、どんな動機でも構いません。是非、我こそはと思われる方は、実行委員として運営に関わってみませんか? 今回の委員は愛知地域会が中心でしたが、岐阜、三重、静岡の各地域会のみなさんも是非一緒に盛り上げていきましょう!



YouTube でも配信された
2次審査会場での審査員のみなさんの様子

コンクール経緯

■応募期間：

2021年4月20日～4月30日
東海地方の9大学36名から応募

■1次審査：2021年5月6日

審査員はオンラインで書類を審査し、
10作品を選出

■2次審査：2021年5月29日

応募者はオンライン参加、審査員は
会場で公開審査
YouTube で配信
金・銀・銅各1作品、佳作2作品、
入選5作品を選定



YouTube には配信されていない
2次審査会場の裏方の様子

関心のある方は okuyi@ishimoto.co.jp まで連絡ください。

建築の質の向上と建築文化の発展のために、この地域の学生の成長を支えるこのコンクールを継続させ、更に価値のある活動に発展させるためには、みなさんの力添えが必要です。よろしく願いいたします!

奥井 康史 (JIA 愛知)

(株)石本建築事務所



JIA 東海卒業設計コンクール 復活に向けて

1. 卒業設計コンクールはなぜ

中止となったのか？

私が東海支部の支部長に就任すると同時に JIA 東海卒業設計コンクールは一旦中止となりました。これには私の指導力不足も勿論のことであると反省をしていますが、もっとも大きな問題は委員会の活性化にあると感じました。委員長に就任すると何期にもわたり勤めなければならず、また新たな委員が入ってくることは一時的にはあるものの長続きはせず、委員会は慢性的に担い手不足の状態が続いていました。委員の誰もが卒業設計コンクールがとても大切なことはよく分かっていたのですが、私の支部長就任時には委員会の継続性に大きなクエッションマークが立ちはだかっていたのです。そこで、委員のみなさまと協議を重ね、なんとか開催に向けて検討を進めたのですが、2019 年は開催することが難しいのではないかと結論に至り、委員会は一旦解散することとなりました。ちょうどその頃、本部では卒業設計コンクールを本部事業とする話し合いが進められており東海支部がその枠組みから外れることは本部、他支部からは大きな問題として捉えられました。本部理事会において卒業設計コンクールを開催しない（出来ない）旨の報告は非常に情けない気持ちでいっぱいでしたが、ここから 2020 年の復活に向けて準備を進めることとしました。

2. 復活へ向けての始動

2019 年に JIA 東海卒業設計コンクール実行委員会は一旦解散する運びとなりましたが、委員の中には本当にごく僅かですが、コンクールの開催を熱望する委員もいました。解散前年の 2018 年に全国卒業設計コンクールの委員に就任された奥井会員（愛知地域会）もその一人で、まずは奥井会員と協議を重ねた上で、2020 年コンクールの開催に向け準備を進めて行きました。また、大学教員の中からも開催を熱望する意見があり、復活

に向けての枠組みの中には大学教員も会議に参加して頂き、協議を進めて行くこととしました。一旦は学生が主催する卒業設計コンクール（NAF）との共催も検討されましたが、最終的には JIA 独自でコンクールを開催することとしました。復活に際して、以前のような大規模なコンクールの開催ではなく、コンパクトで身の丈に合ったコンクールを目指すこととしました。協賛金に頼らず、支部予算（10 万円）のみで運営し、審査員も全て支部会員から選出することとしました。これは協賛金集めが会員の負担となり、支部会員の中には組織事務所から個人事務所まで、とても有能な建築家がいるのではないかと思ったからです。紆余曲折はあったものの開催に向けて順調に準備は進み、審査員の選出、開催日時、開催場所の決定、フライヤーの作成及び大学へ開催の案内まで終えた段階で「緊急事態宣言」の発出となり、苦渋の選択ではありましたが 2020 年の JIA 東海学生卒業設計コンクールの開催を断念することとしました。なんとか私の支部長在任中に復活まで漕ぎつけたいと考えていただけに、中止の決断は本当に残念でなりませんでした。

3. JIA 東海支部卒業設計コンクール

開催へ向けての再始動！

残念ながら私の支部長在任中に「JIA 東海卒業設計コンクール」の復活は叶いませんでしたが新しく支部長に就任した水野支部長、奥井会員とともに復活に向けて 2020 年秋頃より復活の準備を再開しました。この中には森幹事長と二人の強力な会員にも加わって頂き、コロナ禍の中でも無事開催出来るよう万全の体制で臨むよう検討を進めて行きました。審査員は昨年度の人選をベースにし、審査員、大学教員にも会議にご参加頂き、この会議は奥井会員を中心とし毎週開催しました。時には事務局に集合し改善点を協議した結果、2021 年 5 月連休明けに一次審査を開催し、5 月 29 日には無事

「第 26 回 JIA 東海卒業設計コンクール 2021」を開催することが出来ました。オンラインでの審査は初めての試みでしたが、森幹事長、奥井会員をはじめ二人の強力な会員のサポートにより完璧に会を開催できたことは本当に感無量です。学生、大学関係者の方々からもある程度の評価を頂き、主催団体としてこんなに嬉しいことはないと感じました。また、最終的には 36 作品の応募があり、復活初年度としては上出来ではないかと思っています。

4. 完全復活に向けて

今回の「第 26 回 JIA 東海卒業設計コンクール 2021」は、完全復活とは言い難い部分も多々あります。例えば、全国卒業設計コンクールへの進出枠です。従来は 6 作品が全国卒コンへ進出していましたが、今回は 3 作品でした。来年度は従来通りの 6 作品に戻るよう、全国卒業設計コンクール委員会との折衝が必要ですが必ず戻るはずだと確信をしています。また、委員会の構成です。今年度は支部長、幹事長にもご参加頂き、新たに加わって頂いた強力な二名の会員のお陰で無事審査会を開催することが出来ました。まだまだ、人員が不足していると言わざるをえません。「卒業設計コンクール」の意義は多くの会員が認めていると思っておりますが、活動に参加してほしいのです。そうでなければ再度同じことの繰り返しになります。会は参加することに意義があるのかもしれませんが、やはり積極的に活動しなければ意義は少ないのではないですか。委員のみなさま、「卒業設計コンクール」にかぎらず、少し会の運営に興味を示されてはどうですか。今こそみなさまのお力が必要だと思います！



矢田 義典 (JIA 愛知)
〒460-0001 愛知県名古屋市中区錦 1-1-1 矢田義典建築設計事務所

卒コンの意義、会員から意見

東海支部卒コンは JIA 本部の卒コンが始まる前から既にあり、決して地区予選なんかではありません。支部独自の審査員による厳正な審査が行われ、特に公開二次審査は、応募者をもとより審査会に参加した次年度応募予定の学生たちの熱気が感じられました。従来 JIA 会員には教育者も含まれ、支部活動にも活発に参加し建築学会の事業とも連携が取れていました。その中で生まれた卒コンは、東海地区をはじめ全国の設計を志す学生の

登竜門として、また自分の立ち位置を確認する意味で大きな「励み」となっていました。JIA の存続意義は、定款にもあるように会員サービスと社会貢献です。会員サービスには、資質の向上 (CPD 研修、会報誌発刊、支部設計競技) と業務の進歩改善 (告示 98 号の周知・広報、行政との折衝) があり、社会貢献には、子供の空間環境教育、大学特別講義、卒コン、建築相談、ワークショップなどがあります。その意味でも、現在の東海支部の特長で

もある支部 3 大事業 (卒コン、設計競技、会報誌発刊) は何としても死守すべきと考えます。これらの活動を維持するためには支部財政が健全である事が必要ですが、目的を外れた事業を増やし正会員と賛助会から寄付を求め、その結果支部財政を疲弊させることは慎むべきと考えます。

小田 義彦 (JIA 愛知)
(株)伊藤建築設計事務所



卒業設計が必修でなく卒業設計を選択する学生が少なくなっている事を聞いて私は大変驚いています。JIA 東海は全国に先駆け 1994 年に卒業設計コンクールを開催しました。現在は JIA 以外にもナゴヤアイチフェスなど卒業設計を競技する企画がありますが、他の企画は審査員は学校の先生が多く学術中心の選択になる傾向があります。JIA 東海の審査員は

JIA 会員で実社会で建築設計をされている方で社会性を持ち、建築としての実現化への見方も学校の先生とは違っています。卒業設計を評価する企画は多くあった方が学生のためには良いと私は思います。大学卒業後建築設計をめざす学生が減っていると聞きます、設計事務所の仕事環境に問題が多く魅力を感じなくなっている学生が多いのだと思います。

仕事環境の改善は我々 JIA が解決して行かなくてはいけないであろう。そして生き生きとした設計事務所の建築家が審査員として学生と接するこの卒業設計コンクールが設計を目指す学生の選択肢に大きく影響を与えることを期待します。

加古 斉 (JIA 愛知)
加古建築事務所



東海学生卒業設計コンクール委員会では 10 年余り委員としてお手伝いをさせていただきました。その間 3 度審査委員を務めさせていただき、その時の審査委員長は芦原太郎氏 (2000・01 年)、岸和郎氏 (2004・05 年)、古谷誠章氏 (2012・13 年) でした。それまで審査員のみで賞を決定していたものを、2 次審査を公開プレゼンテーションにするべきだと提案されたのは北山恒氏が審査委員

長を務められた時 (2006・07 年) でした。来場者に展示されたすべての作品が閲覧できるよう努めました。そんな 2007 年の 2 次公開審査が行われる直前に一人の審査委員から封書が届きました。展示されている作品は建物として評価することが難しく、建築として描かれている図面があまりにも少ない。私では審査できないので 2 次審査を欠席したいといった内容でした。学生の CG を駆使した技術の向上

もあり、線を重ねて図面を完成させるといった建築作品がほとんど姿を消した時期でもありました。時代と共に表現方法も多様になりましたが、学生の創作の発表の場として卒コンを今後も続けていくべきだと思います。

廣瀬 高保 (JIA 愛知)
(株)中建築設計事務所



協賛者紹介

(株)城戸武男建築事務所
 (株)ヤスウラ設計
 (株)伊藤建築設計事務所
 (株)ワーク・キューブ
 北洋木材工業(株)静岡営業所

(株)石本建築事務所 名古屋オフィス
 加古建築事務所
 (株)三和建築事務所
 森建築設計室
 (株)LIXIL

士(サムライ)
 吉川法人+都市建築デザイン室
 一級建築士事務所 デザイン スズキ
 (株)梓設計 中部支社

※順不同

JIA 建築家大会について 沖縄支部からのメッセージ

大会準備開始

2019年度支部長に就任し、全国大会特別準備委員会を設置、支部役員全員を委員とする組織体制で大会の準備がスタートしました。しかし、2002年に全国大会を開催してから17年が経過しており、一部の委員以外、前回大会を経験したことがなかったため、秋に開催される弘前大会は様々な情報を得るチャンスと、例年の大会よりも多くの方に参加頂きました。

首里城焼失

10月の弘前大会から戻り、次月から本格的に大会の準備に入る予定にしていた10月31日、沖縄のシンボル首里城が焼失する大事件が起きてしまいます。首里城の焼失は、県内どころか県外、国外の方々にも深い悲しみを与え、私たちは魂が抜けたような喪失感に襲われました。そのことは、沖縄・琉球文

化の独自性や大切さを改めて考えさせられるきっかけともなり、大会のテーマにも大きな影響を与えました。

大会テーマ

琉球王朝時代、中国や東南アジアなどとの交易から異種多様な文化を育み、琉球処分後は大和世、戦後はアメリカ世、そして本土復帰と過酷な歴史を辿ってきた沖縄。世界自然遺産にも登録された豊かな自然と開発、今なお広大に残る基地の存在など、様々な矛盾を抱えてきた沖縄は、排除ではなく寛容によりすべてを受け入れてきた真の多様性の歴史があり、失い再生してきたものこそ沖縄の輪郭そのものであると気づかせてくれました。「首里城の輪郭」～失われたことでみえてくるもの～を大会テーマとし、沖縄から全国へ想いを発信する大会にしたいと考えています。

延期と再開

フライヤーの準備も終え、これから全国の支部へ案内をする矢先の4月、新型コロナウイルス感染が再拡大し、一時的に収束しても次の感染の波が予想されること、ワクチン接種がどの程度行き渡るか定かではない環境下では、安心して大会が開催できないため延期としました。その後東海支部様からお声かけを頂き、6月の役員会にてこれまでの経緯や新しいスタイルの大会を模索していること、来年本土復帰50周年の節目の年になることなどを説明申し上げ、2022年度沖縄にて開催させて頂ける運びとなり、8月より委員会を再開させました。ご理解賜りました東海支部様にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

伊良波 朝義 (JIA 沖縄)

JIA 沖縄支部長



自作自演 246

近ごろ日本庭園に興味をもち観たり考えたりする機会が多くなった。

最近の私の関心事は夢窓疎石による創建当時の京都西芳寺の姿である。

現在西芳寺は苔寺とよばれ、地面は一面の苔に覆われ、森のように深い樹木に埋め尽くされ満足に見通しもきかない。池の水面は木々の緑を映し、緑一色のモノトーンの世界となっている。ところが夢窓疎石が創作した西芳寺の姿は全く違っていただようである。西芳寺は暦応2年(1339年)に疎石が依頼を受け、以前からあった浄土寺院を禅宗寺院として再興し中興開山となった寺である。上下二段の庭園のうち下段の池泉庭園では川から水を導入して新たに黄金池をつくり、楼阁建築の瑠璃殿や西来堂、譚北亭、湘南亭などの

夢窓疎石の西芳寺を思い描く

建築を配し池には邀月橋をかけ植栽とあいまって華麗な景観をつくっていたという。

天皇も訪れ花見の宴で舟遊びをし、足利将軍家もたびたび訪れたという。これを見た朝鮮の使節は「その清浄高妙の致、懐に往来し、寝てもねつかれず」と書き残している。三代将軍義満は瑠璃殿にならって金閣を北山殿の中心に据えた。二層の瑠璃殿のデザインを借用して金箔貼の三層にしたのは日本国王として対外的な示威のためであろう。八代義政も何度も訪れ研究しつくして東山殿をつくった、諸堂の名称も西芳寺にならって付けられたといわれる。

これほど注目された西芳寺庭園、当時の姿をみたいものである。

銀閣寺庭園も現在は江戸時代の改修

後の姿で、今に残る建物は銀閣、東求堂のみで、しかも東求堂は移設され、砂の造形である向月台や銀沙灘が追加されており創建当初の姿をとどめていない。



疎石が滞在して庭や諸堂をつくったといわれる多治見永保寺庭園。池に架かる無際橋はいわゆる亭橋(中央に小亭があり一休みできる橋)で西芳寺には邀月橋があり東山殿にもあった。この永保寺の景観が疎石の時代の雰囲気を持っている。

才本 清継 (JIA 愛知)

(株)才本設計アトリエ



残暑お見舞い申し上げます

(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

<p>(株)高橋茂弥建築設計事務所</p>  <p>常務取締役 高橋 康孝</p> <p>〒420-0847 静岡市葵区西千代田町 29-30 TEL: 054-246-2731 FAX: 054-247-0113</p>	<p>八木紀彰建築設計事務所</p>  <p>代表 八木 紀彰</p> <p>〒420-0884 静岡市葵区大岩本町 1-5-305 TEL: 054-245-0186 FAX: 054-245-0186</p>	<p>(株)石本建築事務所 名古屋オフィス</p> <p>オフィス代表 奥井 康史</p> <p>〒460-0008 名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル TEL: 052-263-1821 FAX: 052-264-1990</p>
<p>(株)伊藤建築設計事務所</p> <p>取締役会長 森口 雅文 代表取締役社長 小田 義彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-15-15 桜通ビル TEL: 052-222-8611 FAX: 052-222-1971</p>	<p>(株)城戸武男建築事務所</p> <p>代表取締役 城戸 康近</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内 2-11-23 富士和ビル 2F TEL: 052-231-5451 FAX: 052-231-5450</p>	<p>(株)黒川建築事務所</p> <p>代表取締役 黒川 喜洋彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-15-9 スガキコ第2ビル 2F TEL: 052-203-0281 FAX: 052-203-1884</p>
<p>(株)三和建築事務所</p> <p>取締役社長 見寺 昭彦</p> <p>〒455-0015 名古屋港区港栄 4-5-5 TEL: 052-661-2211 FAX: 052-661-2247</p>	<p>(株)田中綜合設計</p> <p>取締役会長 佐藤 東亜男 代表取締役社長 近藤 眞二</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内 1-8-39 TEL: 052-211-4035 FAX: 052-201-9285</p>	<p>(株)中建設計</p>  <p>代表取締役社長 石田 壽</p> <p>〒460-0008 名古屋市中区栄 2-2-12 NUP 伏見ビル 5F TEL: 052-222-7850 FAX: 052-222-7856</p>
<p>中日設計(株)</p> <p>取締役社長 清谷 英広</p> <p>〒461-0003 名古屋市中区東区筒井 2-10-45 TEL: 052-937-6711 FAX: 052-937-6881</p>	<p>一級建築士事務所 デザイン スズキ</p>  <p>鈴木 利明</p> <p>〒440-0012 豊橋市東小鷹野 4-4-8 TEL: 0532-61-4245 FAX: 0532-61-4215</p>	<p>(株)中建築設計事務所</p> <p>代表取締役 廣瀬 高保</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄 1-27-27 TEL: 052-262-4411 FAX: 052-262-4414</p>
<p>(株)ヤスウラ設計</p>  <p>代表取締役 水野 豊秋</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄 2-35-6 TEL: 052-241-7211 FAX: 052-241-7333</p>	<p>(株)ワークキューブ</p> <p>桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰</p> <p>〒460-0024 名古屋市中区正木 1-13-14 TEL: 052-265-8412 FAX: 052-265-8402</p>	<p>(有) Meet's 設計工房</p> <p>代表取締役 長尾 英樹</p> <p>〒504-0021 各務原市那加前洞新町 2-114 TEL: 0583-71-7528 FAX: 0583-71-8658</p>
<p>日新設計(株)</p> <p>代表取締役 出口 基樹</p> <p>〒514-0038 津市西古河町 20-18 TEL: 059-227-7421 FAX: 059-225-7854</p>		

名古屋のまちは、徳川家康による立地選定で城と城下町が同時に新たに築造された。まさに江戸時代のニュータウンと例えて良い。

他の城下町の多くは、以前からあった武家領主の本拠地を元にして城下町が形成されているから、どこも古い歴史を持っている。名古屋の城と城下町の築造を 1610 年とすると、ともに今年で 411 歳になる。

2018 (平成 30) 年、本丸御殿の復元完成で、最栄期には及ばないものの、名古屋城の城郭イメージが幾分取り戻された。明治の大政奉還にともなって藩主が城を明け渡し、その後、名古屋城が陸軍省の所管となり名古屋鎮台が置かれることにより、本丸御殿は改造、二之丸御殿は取り壊し、下深井御庭は練兵場となり、三之丸の尾張藩家老屋敷も陸軍関係の諸施設に変わった。1936 (明治 26) 年、本丸と天守は宮内省所管となり、その後昭和 5 年に名古屋市に下賜されて、現在に至る。

上記の過程で、取り壊された建物が市内各所に移築されている。

今回はその内の一つ、明治 2 年、名古屋城三之丸から西区見玉 3 丁目大矢家に移築された旧志水甲斐守屋敷玄関車寄とその界限についてご紹介する。

名古屋市営地下鉄鶴舞線を浄心駅で降り、江川線の高速高架を背に西に向かう。うっそうとした緑の押切公園を左手に、押切公園西交差点を過ぎた次の辻を北に折れると間もなく見玉小学校。その西、街区の中に一歩踏み込むと、比較的細い路

地で構成された昔の農村集落の名残を伝える見玉 3 丁目界限に着く。

この一帯のコミュニティの核と思われる白山社の境内前、信長に仕え、その後秀吉の家臣となった丹羽長秀屋敷跡の石碑が建つ小さな社がある。これらの史跡から見るとこの界限は名古屋城よりも古い歴史がありそうだ。

その南、農村集落には似つかわしくない向唐破風の武家門がある。明治 2 年に移築された、名古屋城三之丸にあった志水甲斐守屋敷玄関車寄として使われていたものと言われる。

この一帯は昭和初年頃まではほとんどが農家で、かつての地主の丹羽、大矢を名乗る家が多く、大部分親類に繋がるようだ。戦災にも免れて、区画整理済みの地区ながら、古い集落の面影を伝える町並みが、この一帯のそこ、ここに見られる。

碁盤割りの城下町が尾張名古屋城下の町並みと思われがちだが、城の周辺だったことを証す農村集落的町並みが現代に遺ることが、実は他の大都市圏には少ない名古屋独特の町並みの特色ではないかと思っている。もちろん実証が必要である。

この他、大矢家には名古屋城二之丸庭園にあった茶席「風信亭」があると名古屋市教育委員会の資料に書かれているが、現在は非公開である。こうした遺産を保全することが所有者にとっては大変なご苦労があることと推察する。機会があれば、こうした名古屋の歴史の承認たる建築物を是非、拝見したいものと願っている。



旧志水家車寄席



しゃんしゃん馬の碑

付近の町並



白山社

丹羽長秀屋敷跡碑

【概要】

名称：見玉 旧集落に遺る旧志水家車寄
所在地：名古屋市中区見玉 3 丁目
アクセス：地下鉄鶴舞線浄心駅 徒歩 15 分
市バス 押切公園西



尾関 利勝 (JIA 愛知)

(株)地域計画建築研究所

編集
後記

●暑い夏もオリンピックの閉会とともに過ぎようとしています。支部活動の大きな柱の一つ 東海学生卒業設計コンクールの審査も終わり、受賞者とその作品が掲載されています。諸般の事情で 2 年の空白がありました。が回も 26 回を重ねて学生と社会の建築家を繋ぐ役割を果たしているといつてよいと思います。私たち建築に関わるものだけでなくものづくりの世界では、そこにその人の又その時代の思想、その時代の思潮が落とし込まれます。学生達の作品を見ていると今の自身や若き時代のわたしと知らず知らず重ねているようです。少しタイムトリップしては如何でしょうか?紙面から読み取ることの難しさがあるかもしれませんが、そんな方はぜひ支部のサイトで公開審査風景 (U-Tube) をご覧になって見て下さい。

巻頭を飾る三重大学浅野聡教授の 2020 年度

日本建築学会賞 (業績) を受賞された景観計画群のマネージメントの実践についての業績記が第 3 回を迎えています。これまでの回を見逃した方は隔月の掲載ですから仕事場の書棚から取り出してご覧ください。(黒川 喜洋彦)

●コロナ禍によりイベントを差し控えるようになり、活動報告が減りアーキテクトも 8 頁構成が続いていました。本号は復活した卒コンについて、審査の報告と関わってきた方々の思いを伝えるために 8 ページ増となっています。久しぶりのボリュームにコロナ明けの兆しを感じる号になったように思えます。

その卒コンの記事には、若い方たちの社会に対して積極的な提案が際だって感じられました。紹介されている作品は、身近なところでの問題解決が、より広い社会に適應できるように感じました。審査員の皆さんの講評が学生さんの思考以上に、作品から新しい見処を引き出しているのかもとも。誌面では作品自体の内容

が明確に見れないので、伝えられている魅力が具体的にどうなのかがわかりにくいと思います。紙媒体と web の連携を活用して、誌面に載せきれない情報を web で補えるようにできればと今回強く思いました。(服部 昌也)

ARCHITECT

第 396 号

発行日 2021.9.1 (毎月 1 回発行)

定価 380 円 (税込み)

発行責任者 水野豊秋

編集責任者 川本直義

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井 10 番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社) 日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

初夏の 植木生産圃場見学会

6月19日(土)住宅研究会主催にて稲沢市にて開催されました。生憎の大雨の中ではありましたが、会員10名一般6名の参加がありました。この会は今年4月に行われた「天使の森/みんなのトイレプロジェクト」にて自然の真只中にて活動するなかで、参加いただいた造園家の朝日宏和氏(Beggarticks)と今一度植物、庭について学ぼうと話したのが始まりです。昨今の住宅では屋外と屋内の中間領域が注目され、建築家は庭だけでなく建築の一部として植栽を扱うような機会もあります。建築家は植物を扱う造園家の想い、さらには生産者の声を聞き、それぞれの植物の特性を理解した上で適した植物の

配置計画を提案し、植物にも人間にも快適な空間と環境をつくり、生活をより豊かにできればと考えます。またJIAの掲げるSDGs、カーボンニュートラルにおいても、意識をすることで貢献、解決の糸口の発見に繋がればとも考えます。(私見ですがかつて東西に長く日当たりの良い住宅は南前面に植物があり、街の緑地としても機能していました。昨今は合理的に敷地を分割し庭を持たない住宅が増え、その結果街の緑地が減り気温上昇を煽り、CO2排出にも影響しているかと思えます。→「街は森になればいい。」)当日は国分農園にて、橋本昌博氏(株式会社国分農園代表取締役)の案内による圃場見学、その後「生産者として、施工者としての役割」についての学習会が行われ、植物の種類、環境、条件、土壌の性質等、日ごろ離れた分野でもあり、参加者との活発な意見交換会となりました。以降、7月16日にはJIA近畿支部大阪建築部会が主催する「白鳥庭園(熱田神宮西)の森を探訪」(講師:吉村元男)にて、日本



山に近い環境で育てられた樹木を観察する

庭園と日本建築と流れる水の物語、ランドスケープデザインの挑戦を学び、さらに秋にはマレス・エマニュエル氏を迎え[ジル・クレマンの思想について]と題し映画「動いている庭」と著書『庭師と旅人』について考察する機会を予定しています。

建築から庭ではなく、庭、植物、地球のランドスケープから建築を考えていくきっかけに繋がれば幸いです。

西村 和哉 (JIA 愛知)

h + de-sign / architect



棟梁として内と外を算段する建築家に期待

四大植木生産地のひとつ愛知県稲沢市でも、高齢化のため耕作されていない農地が目につきます。そんな中、生産方法を考え、努力している国分農園を建築家に見学していただき、庭について、植物について、今一度考えていただきたいと思ひ、植木生産圃場見学をお願いしました。

通常、植木の生産は、生産性を高めるため同じ種類の樹木を並べて育てます。すると、真っ直ぐ育った同じような樹形の植木が生産されます。一方、国分農園では、山に近い環境で畑を作ります。大きな木の足元に苗を植えると、苗は日光を求め大きな木の枝を避けて成長します。そこで苗から成長した姿は、1つ1つ違う方向に、華奢で繊細な枝ぶりに育ちます。その姿は通常の植木畑で生産したものとは一線を画す姿で、山採りの雑木のようなです。

まわりの畑が、真っすぐ列植されている中、国分農園の畑だけが、モミジ、ガマズミ、ジュンベリーなど、サイズも種類も違う植木が養生されています。ここで育った植木を、私は、「山採りの雑木レプリカ」と呼びます。環境の違う遠くの山で掘って、

養生し、植えるよりも、枯れるリスクを軽減できます。

下草は、通常園芸店で出回っているポットのサイズより大きなポットで育て、株を大きくし、植えた直後から魅せるサイズにして出荷します。「考え、努力して生産する植木を地元愛知県で選び、植える」を促進していただきたいと思ひます。

実は植木生産圃場見学会は、2015年7月に住宅研究会のご協力のもと、5名の建築家、5名の造園家にプレゼンしていただいた「べちゃくちゃないと名古屋#23」を開催した頃から、実現したいと考えていました。

私が、脱サラし、乏しい知識で今までやってこられたのは、生産者、庭師の皆さんに知識を分け与えていただいたおかげですので、私の役割のひとつに、「庭師のために」というものがあります。上記イベントも今回の見学会も、建築家に庭、植木の見識を深めていただき、造園業界も活性化していただきたいという勝手な思惑がありました。

昔の日本の家づくりは、棟梁に相談し、

棟梁は、家の事情を知り、的確なアドバイスをして大工、左官、庭師が作っていききました。おそらく、棟梁が「この土地に家を建てる。どこに建てて、庭はどこにつくる?」と聞くと、庭師は「ここに建ててもらい、こちらに庭をつくる」と的確に答えることができたでしょう。現代では、敷地分割の問題もありますが、この質問に的確に答えることのできる庭師が減っているように思ひます。

現代、棟梁の役割を担うのは建築家です。外の空間も建築の一部として捉え、より豊かな生活をアドバイスするためにも、植木・庭師の特性を学び、建築のスペシャリストであると共に、棟梁として内と外を算段するジェネラリストとしての今後を建築家に期待しつつ、私共も庭の重要性を発信していく努力を続けていきたいと思ひます。

朝日 宏和

ベガーティックス





株式会社国分農園の橋本昌博氏による説明



ビニールハウスにて苗木を育てる。



「生産者として、施工者としての役割」学習会



山に近い環境の畑を作る。苗は日光を求め、大きな木を避けて成長する。



通常の植木畑で生産したものとは一線を画す姿となる。

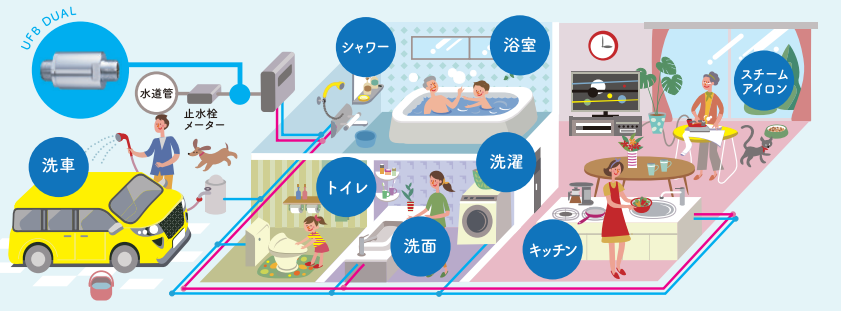
水道の元栓に設置するだけで おうちまるごと、ウルトラファインバブル水！

UFB DUAL™
ウルトラファインバブル デュアル

UFB DUAL™を水道の元栓に設置するだけで、
建物内全ての水道水がウルトラファインバブルに。

＼ウルトラファインバブルで暮らしが変わる！／

<p>洗浄効果</p> <p>家事がラク！</p>	<p>美容効果</p> <p>肌がつるつる！</p>	<p>酸化抑制効果</p> <p>鮮度が長持ち！</p>
----------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------



- ✓ 簡単施工
- ✓ メンテナンス不要
- ✓ すべての住宅に設置可
- ✓ 水量・水圧が落ちない
- ✓ ランニングコスト0
(カートリッジ・電気代不要)

日本最大級の展示会に選出され、さまざまな賞を受賞。
今、注目されている製品です。



世界初 特許技術により、日本で唯一の水道機器認証を取得した
ウルトラファインバブル生成ノズル



スタートアップワールドカップ
大阪大会2020
優勝&SUNTORY賞
W受賞！

お客様へのご提案の商材として
他社との差別化のツールとして



御社の事業に
お役立てください！

UFB DUAL™ 正規代理店



当社は名古屋エリアの正規代理店です。販売・施工は全国対応！
お気軽にお問い合わせください。

TEL.052-914-0300

詳しくはこちら ▶▶▶

<http://sign-saikosha.com/ufb/>
[営業時間] 9:00-18:00 (土日祝除く)

